



枝廣淳子の 賢者に備えあり 経済成長に 頼らない社会へ

なくとも二つの意味があります。

一つは「人間活動が地球の支えられる範囲を超えてしまっている時代」ということです。

私たちの経済は、資源の供給源・廃棄物の吸収源としての地球に依存しています。「人間活動を支えるために地球が何個必要か？」を示すエコロジカル・フットプリントの現在の数値は一・五。つまり現在の人間活動を支えるためには地球が一・五個必要なのです（ちなみに日本だけだと二・一・四個です！）。

もちろん地球は一個しかありません。私た

安倍政権の経済政策「アベノミクス」の三本目の矢である成長戦略の「二〇一三年度から二二年度の平均で名目GDP成長率三％程度、実質GDP成長率二％程度」という目標の背景にある「経済は拡大し続けるべきもの」という考え方にも申させてください。

ちなみに「成長率三％」は小さく感じるかもしれませんが、二十四年後には経済規模は二倍になります。この時代になってもなお、「経済の拡大」だけを考えていてよいのでしょうか？「この時代」という言葉には、少

ちば過去の遺産を食いつぶし、未来から前借りをしながら経済活動を営んでいるのです。そして、地球の大きさは変わらないのに、人間活動や経済の規模は拡大の一途です。

元世界銀行チーフエコノミストのハーマン・デイリーが「経済学者が、地球自体も同じ速度で成長できることを示してくれたら、経済が無限に成長する可能性があることを受け入れよう」と言うように、有限の地球上で無限の経済成長はありえません。

そして、もう一つの「この時代」の意味は、「日本が急激な人口減少社会に突入している時代」ということです。

国立社会保障・人口問題研究所によると、日本の生産年齢人口（十五〜六十四歳）は一九九五年には八千六百二十万人だったのが、二〇一五年には七千六百八十二万人、二〇三五年には六千三百四十三万人、二〇五五年には四千七百六万人へと半分近くになっていきます。

「GDP＝労働生産性×労働者数」ですが、この労働力の急減を補うほど労働生産性を上げ続けるのは大変なことでしょう。

「労働力を外国人労働者で補えばよい」という声もありますが、二〇三〇年に労働力を二〇〇〇年代初めの水準で維持するには、合計二千四百万人もの外国人労働者が必要」という試算を見ると、かなり難しいことがわかります。

そういう時代だからこそ、「経済規模が拡大

し続けなくても、国民が安心して幸せに暮らせる社会・経済にシフトしていく」グラントビジョンを今のうちに描き、具体的な方策を打ち出して社会を引っ張っていくことが政治リーダーの役割ではないでしょうか？

社会保障をはじめ現在の社会・経済の構造では、経済成長が止まると「困る」状況が生じます。「だから経済成長が必要だ！」がこれまでの論理でしたが、考えるべきは「必要であっても可能ではない場合、どうしたらよいのか？」です。現実を目をつぶって可能なフリをし続けるのではなく、永続的な経済成長を必要としない社会・経済の構造に変えていくことではないでしょうか？

世界では、サルコジ大統領（当時）の諮問で「GDPよりも幸せを測るべき」という報告を出したフランス政府、「成長なき繁栄をいかに創り出していくか」という報告書を出した英国政府のほか、最近ドイツ議会でも「幸せをどう測るか」をめぐる一千ページの報告書が出されたように、「永続的な経済成長が不可能となる時代の国家のあり方や国民の幸せ」の議論が、国のレベルでも盛んです。

もともと「パイを大きくする」経済に対し、「パイの再分配をする」のが政治の役割だったはず。「大きくなれば分配を考えなくてもよいから」は、もう通用しません。世界に先駆けて人口減少社会に突入した日本だからこそ、新しいビジョンとモデルを創っていくことが求められています。（幸せ経済社会研究所所長）